秋高同窓会だより

題字は第六代塩田会長

発行者
秋田県立
秋田高等学校同窓会
秋田市手形字中台一番地
TEL　0188(32)9553
印刷所
秋田マイクロ写真印刷株式会社

平成８年度総会

一般会計　千八百万の予算で事業遂行

去る7月14日、アキタニューグランドホテルにおいて、本年度同窓会総会が開催された。約百二十名の参加会員の活発な審議を経て、議案はすべて原案どおり承認されたが、本年度は会費の納入が順調なことを受けて、千八百万というかつてない大きな予算で事業を遂行することになった。その後の役員改選では、貝田悦男氏（S30）が新監事に選出された。総会終了後、卓球の元世界チャンピオン木村興治氏（S34）による記念講演が行われた。

谷村修、斎藤光弘の両氏（S51卒）の司会により、例年のように、校歌斉唱、物故会員への黙禱のあと、会長、校長からおよそ次のような挨拶があった。

会長挨拶－「昨年青森支部が発足、札幌支部が活動を再開するなど、支部の活動が盛んになってきた。特に女性の積極的な活動が目につく。今後益々活発な活動にしてゆきたい。また、本日は審議へのご協力をお願いしたい。」

校長挨拶－「今年度冊子にまとめた『二十一世紀を展望した秋田高校の振興方策』を基に、学力の充実、部活動の活性化を図っていきたいので、同窓会のご支援をお願いする。」

続いて**会務、事業報告、常置委員会報告**が行われ、前号に掲載した内容の各委員会の報告がなされた。特に財政委員会からは、昨年度から始まった会費納入制度により、八八〇万の予算に対して、一三三〇万の納入があり、本年度は、やや少な目の一一〇〇万の納入予想としたことなどが報告された。

次に議事に入り、昨年度収支決算、本年度事業計画および収支予算案が、事務局案どおり承認された。

その後の**役員改選**では、現監事の米谷節郎氏（S26）の後をうけて**貝田悦男氏**（S30）が新たに監事に選出され、また、その他の役員は留任となった。

総会終了後、木村興治氏による記念講演が行われ、実践に裏づけられた説得力のある お話に、参会者一同深い感銘を受けた。

講演のあと懇親会に移り、和やかな歓談の中にすべての日程を終えた。

ボート全国準優勝

惜しくも優勝を逃がす

平成八年度全国高等学校総合体育大会、第四十四回全日本高等学校選手権競漕大会が八月六日から十日にわたり山梨県河口湖で行われ、本校のボートが男子舵手付きフォアで見事準優勝を果たした。

昨年、全国選抜二位、インターハイ三位のメンバーを二人残し、新しく加わった三人も体格、体力に恵まれ、昨年を上まわるクルーが編成できた。創部百周年目を全国制覇で飾るべく、厳しい練習を重ねて来た。迎えたインターハイ。準々決勝までは、二位以下に大きく差を付けて勝ち上がった。準決勝は、実力上位の三クルーが集まり、事実上の決勝。本校クルーはスタートから飛び出し、そのままトップでゴールした。優勝は、目前にあった。しかし、全国制覇の壁がまだあった。決勝を前に、クルー全体のいけるぞという意識が堅さに変わった。決勝では、いつもの漕ぎが出なく、準決勝二位の青森県田名部高校に敗れ、無念の二位であった。

（ボート部、小林監督記）

記念講演

「スポーツにおける自己開発」

－私の卓球活動を通じて－

木村興治氏（S34卒）

私は小学校時代から26才まで、ラケットを握らない日はないという卓球漬けの毎日を送った。秋田高校では小林忠雄監督（現副会長）の指導のもと、インターハイに出場できた。その後、早稲田大学に入学し、当時キャプテンを務めていた佐々木岩男氏（S31）等と共に練習に励んだ。その頃から世界を目指そうという夢を持ち、その実現のために、誰にも平等に与えられている**時間を出来るだけ有効に**使おうと考えた。つまり、一日を、勉強その他に8時間、睡眠に8時間、卓球の練習に8時間振り分け、特に練習時間の8時間は絶対に削らないことに決めて頑張った。その甲斐あって、最初は自分の非力さを痛感させられたものの、二年生の頃から、相手の球がどこに来るか読めるようになり、世界チャンピオンの荻村を破るなど、それまで勝てなかった強い選手に勝てるようになった。その後の大会で荻村に敗れるということもあったが、そのことから、**負けた時の悔しさをエネルギーに変えて**、次の練習に生かしてゆくことの大切さを痛感した。

20才の時に世界選手権のメンバーに選ばれて、合宿では2千本ラリーなど厳しい練習をしたが、当時世界のトップにいた日本チームとしては当たり前のことだった。その年の世界選手権は北京で開催され、日本は団体戦の決勝でその中国に3対5で敗れた。日本の連勝はストップしたが、中国からは色々なことを学んだ。中国のすばらしい選手達をライバルとして自分も鍛えられた。彼等の中には現在スポーツ省の大臣を努めている人もいる。また、中国は大会には国を挙げて参加し、勝利に対する執念が感じられた。例えば、私に勝つために私と同じタイプの選手を作って練習相手にさせていた。ただ残念だったのは、一九六六年から始まった文化大革命のために、中国がスポーツでも国際舞台から去り、自分の良きライバルであった選手達が辛い目にあわされ、中には自殺した者まで出たことである。しかし、そのような修羅場をくぐり抜けた現在、彼等は一層強くなって世界で活躍している。

就職後は会社の仕事の合間をぬって練習に励んだ。大変であったが、**自分の置かれた厳しい状況を発奮材料にして**、中国に勝つことを目指して頑張った。その頃の経験から、人間は厳しい環境の中で、危機感を持って努力して初めていい仕事が出来るのだということを学んだ。

現在自分が理事を務めている国際卓球連盟は、国単位で加盟するのではなく**協会加盟制度**をとっている。高い技術を持ったすぐれた選手は、どこにいてもすぐれた選手であることに変わりないことを考えれば、国籍に関係なく大会に出場できる今の制度はすばらしいと思う。

私が今までの卓球人生から感じとったことの一つは、こうありたいという**高い望みを持ち続けること**の大切さである。中国が強いのは、どんな苦しみにも耐えて、常に勝ち続けたいという強い意志を持続させているからである。また、大きな大会になると精神力が物をいう。精神力を鍛えるには、負けた時に起き上がって相手から学びとる力、試合に集中できる力、我慢する力、を養うことである。日頃からその努力をしていれば、フェアプレイも自然に出てくる。母校の剣道部員がユネスコのフェアプレイ賞を受賞したのも、そのような日頃の心掛の結果だと思うし、自分自身も中国の選手との試合で、審判のミスジャッジに、わざと相手に得点させて、それが相手との友好を深める結果を招いたことがあった。コツコツとトレーニングを重ねて体力をつけること、これだけはというオンリーワンの技術を身につけることなども大切な点である。ただ、その際に、「当たり前の状態」をどこに置くかが問題になる。私は、**伝統とは「当たり前の状態」の高さにある**と思う。秋田高校が「伝統校」であると言われるのは、求められる「当たり前の状態」が高いからである。勉強においても、部活動においても、知らないうちに高いものを求め、それが「当たり前」となり、伝統となってゆくのだと思う。かっての日本の卓球も世界で勝つのが「当たり前」で、そのためにはどんな厳しい練習も苦にならなかったし、現在の中国もそうである。

私の選手生活はそんなに長くはなかったが、選手生活から足を洗った後も、卓球を通して、仕事や国際親善の面で役立つことができ、スポーツをしてきてよかったと心から思うのである。

木村興治氏略歴　秋田市生まれ。昭和34年秋田高校卒業後早稲田大学入学。昭和36年全日本チャンピオン。同年から4回連続して世界選手権大会に出場し、男子複、混合複（2回）、男子団体と4個の金メダルを獲得。現在ゼネラル石油人事部人事室長としての仕事の傍ら、日本卓球協会国際関係アドバイザー、国際卓球連盟理事などを努める。埼玉県浦和市在住。

天上天下

レンガ色のモダンな現校舎がほぼ完成に近づいていた八十六年の遅い春、卒業以来初めて母校を訪れる機会があった。心臓破りのうぐいす坂の急カーブと両側に連なる桜、それに続く土手を彩る鮮やかなツツジ群。正門脇の桜の古木も散り際の花びらをいくつか健気に枝に留めていたのを思い出す▼野球練習場のバックネットには「鎧袖一触」の古びた横断幕、サッカー、ラグビーグラウンドは相変わらず水はけが悪いとみえて至る所に水たまり。プールサイドを通ってグラウンドに降りる急勾配の階段も、体育館に空いた大きな穴も二十一年前そのままで、新校舎とのアンバランスに不思議な感動を覚えたものだ▼学生服の詰め襟の奥から当時流行のアイビールックのシャツをのぞかせ、髪はバイタリスか何かできっちりキメ、帽子はかぶらず、何も入っていない手提げカバンを超薄っぺらにして泰然と歩くのが、当時のいわば最先端秋高生ルックの定番スタイル。喫茶店によく出入りしてエレキサウンドに夢中になったものだ▼これに対して向学心に燃える生徒は自転車の荷台に厚いカバンをくくりつけ、尻がテカテカに光るズボンをはいて遅刻ぎりぎりに学校にすべりこみ、授業が終わると一目散に学校図書館に直行、まさに夜に日を継ぐ勉強の連続だった。もちろん、硬軟両刀を使い分ける器用な生徒もたくさんいた▼時代は巡って秋高生の気質も秋高を取り巻く環境も当時とは随分変わったはずだ。変わって当たり前、そうでなければ伝統は古色蒼然としたまま新しい血を注入できずに枯渇の運命をたどるしかないからだ。大切なことは生徒も教師も「秋田県一」に甘んじるのではなく、常に「全国」を視野に入れる気概を失わないことである。

会費納入の決定に当たって

左の８年度予算を組むに当たって、財政委員会を二回も持って慎重審議したのは、会費納入の件であった。昨年は初の全会員会費制を取り入れた年で、延六千六百三拾四名（会費納入可能会員を約二万名として、約30％）もの会員に納めていただいたが、二年目の８年度は果たして一千三百万以上集まるか―これだった。一千二百万案、一千一百万案、そして一千万案と出たが、事業費の内「だより発行費」「新入会員歓迎費」はこれ以下では出来ないし、とくに、「資料館整備運営費」にいたっては、今年度中に「秋高の歴史にみる人物像」を羽城館に掲額するとなると、「七十六万」では、すでに不足なのを、次の年度の予算計上を含めての予算であった。

会費納入をもう百万円あげると万端整うわけだが、昨年度五年間の会費を納めた会員五十名が今年度は納めないことを考慮しての、ぎりぎりの抑制選択だった。

果たして、会員皆さまのご協力を得られるか。今後の「だより」の出来、事務局のPRのいかんにかかっている。

平成７年度決算書

《収入の部》　（単位：円）

科目	7年度予算額	7年度決算額	比較 増	比較 減
1.入会金	3,340,000	3,336,000		4,000
2.会費	8,800,000	13,269,620	4,469,620	
3.協賛広告収入	730,000	527,630		202,370
4.基金運用収入	300,000	307,557	7,557	
5.寄付金	10,000	−		10,000
6.雑収入	25,000	88,788	63,788	
7.繰入金	1,000,000	−		1,000,000
8.繰越金	1,955,005	−		
合計	16,160,005	19,484,600	4,540,965	1,216,370

《支出の部》　（単位：円）

科目	7年度予算額	7年度決算額	比較 増	比較 減
1.事務費	4,490,000	4,172,723		317,277
2.会議費	2,550,000	2,644,749	94,749	
3.事業費	8,800,000	9,923,715	1,123,715	
4.基金	−			
5.雑費	270,000	238,614		31,386
6.予備費	50,005	−		50,005
合計	16,160,005	16,979,801	1,218,464	398,668
次期繰越	0	2,504,799	3,322,501	817,702

平成８年度予算書（案）

《収入の部》　（単位：円）

科目	7年度予算額	8年度予算額	比較 増	比較 減
1.入会金	3,340,000	3,232,800		107,200
2.会費	8,800,000	11,000,000	2,200,000	
3.協賛広告収入	730,000	880,000	150,000	
4.基金運用収入	300,000	300,000		
5.寄付金	10,000	10,000		
6.雑収入	25,000	25,000		
7.繰入金	1,000,000			1,000,000
8.繰越金	1,955,005	2,504,799	549,794	
合計	16,160,005	17,952,599	2,899,794	1,107,200

《支出の部》　（単位：円）

科目	7年度予算額	8年度予算額	比較 増	比較 減
1.事務費	4,490,000	4,245,000		245,000
2.会議費	2,550,000	2,820,000	27,000	
3.事業費	8,800,000	10,665,000	1,865,000	
4.基金	−			
5.雑費	270,000	190,000		80,000
6.予備費	50,005	32,599		17,406
合計	16,160,005	17,952,599	2,135,000	342,406

提言

改革への自己認識

小林　洋（昭和三十六年卒業）
現 秋田北高校教頭

秋田高校も創立百二十三年目を迎え、同窓会会員は二万名を越えるという。教育目標の「学力の充実・品性の陶冶・心身の錬磨」は今日も変わることなく存在し、「自主自律と文武両道」のモットーは脈々と受け継がれているはずである。活性化にさまざまな意見が寄せられているが、十年間の在職をもとに、改革への内なる意識をいささか述べてみたい。各県の公立の名門校が軒並みいわゆる旧来の良さを放棄して、入試のみに固執しているかに見えるのを思うと、母校が全人間的な教育になお比重を置きながらも進学実績をあげている現況は高く評価される。と同時に希有なことだと言わざるを得ない。

しかし秋高はその時々で課題に対し、時機を捉えて鋭く対応してきたといえる。とかく今、形骸化されたと見られがちな「着装の自由化」への生徒職員一丸となっての取り組みの熱意などは、最たるものであったのでなかろうか。

☆

今般十月に『二十一世紀を展望した秋田高校の振興方策』が提示され、具体的に五つの改革と三つの提案が示された。社会が変化し、価値観が多様化している現在、教育も変革が求められており、時宜に叶った提案として注目している。

☆

個を尊重しながら、自由を自己管理することの難しさは何度となく論じられてきたところである。日々の生活の場で常に検証されるべき自己の行動への意識が、ともすれば一部でないがしろにされ、薄れてきたのでなかろうか。自己を律する強靭な自制心の涵養に努めるとともに、時には対峙してでも、機会あるごとに将来を見据えた一致した指導が必要であると感じた。

☆

学習と部活動の両立を実現する後輩達は称賛に値する。だが、自覚とけじめのない「文武両道」など秋田高校ゆえにないと信じたい。基本的な生活のリズムを大事にして、先輩たち同様、授業で己れを徹底して鍛える努力を真摯にしてほしい。何が大事で、何をなすべきかのコンセンサスを保護者も含め図るべきだろう。

☆

話題のダニエル・ゴールマンの著書『EQ～こころの知能指数』を興味深く読んだ。IQではなく、「こころの知能指数」（EQ）が人間の生き方と深く関わっているという。EQの高い人とは、自分の気持ちを自覚し制御できる人や他人の気持ちを推察し対応できる人であり、組織の中や社会に出て活躍するのはEQの高い人だと断言する。

百三十年に向かうこの時期地道に確固とした改革への認識をして、より逞しさと人間性を備えた人材が育ち、同窓会の活性化につながるならば振興策を掲げた意義も十分ある。大いに期待している。

'97年度入試いよいよスタート

進路指導主事
菊谷　一

'97年度入試は新教育課程における最初の入試でもある。

そこでこの新課程入試の特徴にも触れながら本校生の現状について概観してみる。

〈センター試験出願状況〉

平成九年度センター試験の出願受付が10月11日から始まり、同22日で締め切られた。18歳人口の減少に伴い大学受験生数も平成四年以降減少し続けているが、センター試験志願者は過去最高の60万人を記録した。来年度のこの試験の主な特徴としては、①試験科目が6教科31科目と多様化した、②私立大のセンター試験の参加が新たに30大学85学部増えた、③選択科目間の有利不利が懸念される、④国公立大の多教科受験型の傾向が強まったことなどが挙げられる。

本校でも国公立大人気を反映して志願者の増加を予想していたが、結局は409名（昨年434）で志願率91・5％（93・5）にとどまった。私大専願や専門学校志望者の増加によるものである。なお男女別の志願率は、男子の88・1％（97・0）に対し女子が96・2％（87・0）となっており、五教科六科目受験予定者はアラカルト入試の影響を受けた形で志願者総数の84・4％（88・3）であった。

〈新課程入試を控えて〉

来年度入試の主な特徴としては次のことが挙げられている。全般的には、医・歯・薬・保健・看護といった実学系学部の人気が依然高く、地元志向・ブロック内志向が根強い。国立大に関しては①戦後初めて実質的な定員減に転じた、②基本的に全大学が分離分割に移行した、③個別試験では、小論文・総合問題・面接・リスニングなど従来型の学力検査によらない選抜方式をとる大学が増加していることなど。また、私立大に関しては、入試改革が依然続いており①センター試験を利用した入試が増大した、②後期（二次）募集枠が拡大している、③入試方式の複線化が強まっている、④地方試験会場を設置するところが多くなってきた、⑤試験日を自由に選択できるようにしてきていることなど、氷河期を迎えた大学の苦心の跡がしのばれる。

本校三年生の11月現在の進路志望状況は、在籍446名中国公立大志望338名、私大88名、専門学校7名などとなっており、人気学部の傾向は全国とほぼ同じ。また大学別では、東北大の65名を筆頭に秋田大44・北大30・新潟大28・筑波大22・東京学芸大18・早大16と続いており、東大10・京大7となっている。

模試の成績などから判断すると、合格圏にはまだ遠いと思われる生徒が結構見られるが、取りかかりの遅い秋高生の真価が問われるのはこれからである。秋高生の気質は、模試などの判定に大きく左右されることなく、自己を信じ、教師を信じて最後まで執拗に食らいつく気概を忘れないところにあるし、焦らずにじっくり最後の調整に入って、執念で志望大学に進学するところにある。高校生活最後に、秋高生の意地を見せてもらいたいものである。

運動部員を対象に学習カウンセリング

本年度より、校務分掌の中に「運動部支援担当」が設けられた。公欠で授業を欠くなど悩みがちな運動部員をバックアップしていこうというもので、英語・数学・国語の職員八名（主任長崎淳子先生）が携わっている。各部単独での学習会はこれまでもあったが、学校として、組織的継続的に対応していくのは初めての試みである。

長崎淳子先生によれば、四月以来、担当職員間での話し合いを重ね、まず、前期中間考査を見通した第一回目の「カウンセリング」を、六月初めより五日実施した。参加者は、少ない日で三名、多い日で三十五名であった。その後、担当者及び参加生徒の反省要望を検討し、

○自学自習を基本とする。
○部員自身が学習計画を立てる。
○質問事項や学習に関するさまざまな相談に対応する。

などの点を柱として、回を重ねてきているとのことである。

月に一度、各部の練習休みに利用してもらえればよいという形で案内を出している。事前に希望者を募ってから参加してもらっているが、希望者は毎回ほとんど全員参加している様子。

文武両道・自主自律を掲げる本校の運動部員にとっては、いかに継続的学習を自分のものにしていくかのカウンセリングをしてもらう場としての意味が大きいようである。

写真を撮らせてもらった日も、一・二年が二室に分かれて熱心に取り組んでおり、充実した時間を持っていると感じた。

祝

藍綬褒章受章
伊藤　銀蔵（昭18卒）
小林　忠雄（昭28卒）

勲二等瑞宝章受章
県文化功労者表彰
能登　文敏（昭14卒）

勲三等瑞宝章受章
斎藤　葆（昭14卒）

勲四等瑞宝章受章
三浦　統朗（昭16卒）
成田　勉（旧職員）

文部大臣表彰
地域文化功労者
伊藤　博次（昭12卒）

文部大臣表彰
TET-ジェットプログラム10周年記念功労者
米田　進（昭45卒）

県文化功労者表彰
沓沢　尚之（昭16卒）

秋高一年生らABS高校クイズに挑戦

秋高生はクイズが好き?ほとんど毎年挑戦しているようだが、成績面ではかつて準決勝進出が最高だった。小野・高貝ら三年生だった。今年度の準決勝敗退はそれ以来。しかも一年生。今後に大いに期待しよう。

戦いの記録

7月14日朝、われわれは仙台にいた。高校生クイズ東北予選。会場の榴ヶ岡公園には多数の高校生が集まっていた。

9時30分、選手入場。10時を過ぎたころ、福澤朗が登場し、東北予選が始まる。

最初のクイズは毎年恒例のYES・NOクイズ。毎年とんでもないクイズが出るのでほとんど運の勝負。われわれはこのクイズを最大の難関と思い、対策を練っていた。今年はキット「宮澤賢治」の問題が出ると予想、調べたが、結果的には見事にはずれた。

問題、「あきたこまちのはえぬきと夢ごこちでめぐり合い。日本晴れの微笑みにゴロピカリと一目惚れ。恋心は茜空のきら397。乙女心の一本じめを心待ち」—この文章の助詞以外の語句は皆「米」の品種。こんな問題分かるはずがないと思ったわれわれは、TV的に盛り上がるのが「YES」という答えで、YESで行くことにした。

ところが、移動してみると圧倒的にNOが多い。クイズは多数決ではないが、不安はヌグイきれない。正解が発表された。答えは「YES!!」

しかもこの問題に正解した秋田のチームは、4チーム。スベテわが秋田高校。YES・NOクイズ各県8チーム勝ちぬきなので、われわれはわずか一問で通過。

続いて行なわれたのはペーパークイズ。「早押し」クイズを苦もなく通過し、残ったのは各県2チーム。県代表の座をかけて行なわれたのが、「クイズどろんこ米騒動」—説明すると、二つに分かれた稲の束の形の積木を持ち、崩さないように泥の中を走るというクイズ。見た目以上にきついこのクイズ—何度も積木を落とし、解答権を取っても間違いといろいろ苦労したものの、なんとか横手高校を下し、県代表の座を手にいれたのだった。その日家路につくわれわれの手には代表の証したるメダルとライオン製品詰め合わせおよびライオンちゃん人形があった。

8月14日、東京で高校生クイズ本選が始まる。

第1ステージはサバイバルゾーン。全員一斉の早押しクイズで落ちるのは数チーム。「ここで負けたら恥」という緊張感の中、われわれは2・30番目という中途半端な時に勝ちぬいた。

第2ステージはタイムゾーン。一問多答クイズに正解の最大5チームが、さまざまな形式の通過クイズに挑戦。正解すると勝ちぬけだ。第2ステージ会場の43チームに対して勝ちぬけチーム数は15チーム。かなりの高倍率。このクイズは長期戦となる。通過クイズが難しく、なかなか勝ちぬけチームが出ない。スタジオは緊張感に包まれ、選手たちはいらだち、中にはキレるチームもあった。そんな中、われわれは「太陽系の惑星の中で地球より大きいものを挙げよ」という問題を正解、次の「どこかに電話して、その相手と連想クイズをする」という通過クイズも突破、第3ステージへ駒を進めた。

第3ステージはサスペンスゾーン。カー用品店に残されたヒントから爆弾の入った車を見つけること。このクイズは比較的簡単。むしろ通過した後の、38度の炎天下を、他チームを待つのがすごく辛かった。

作戦の誤りか、準決勝で敗退

勝ち残った6チームで行なわれた「準決勝」

各チーム一人が座席に座ってクイズに答える。単独最下位が出たら、その人は脱落。二人目にチェンジ、とやっていって、3チームが誰もいなくなった時点で終了。われわれのチームはリーダーの嵯峨のワンマン・チーム。個人戦のこの戦いをどう勝ちぬくか。嵯峨を最後にして、前半は他二人で凌ぐ作戦を取った。だが、これが裏目に出た。

まず、一番目黒がいきなり脱落。続く高橋はわずか二問で負けてしまい、残り一人になった。最後の嵯峨が奇跡的な粘りを見せるが、「カール・ルイスがアトランタの走り幅跳びの後、袋に詰めたものはなにか」の問題をはずし、戦いは終わった。

準決勝敗退。敗れたわれわれは飛行機時間のせいで、東京観光もできず、「疲労困憊」そのもので、秋田へ返って来たのだった。

運のツキ

嵯峨隆之

8月15日夕方、場所は新宿のビル街、僕はバスの中。

「まさか、ここまで来るなんて…。」—これが僕の素直な気持ちだった。

子供の頃から出たかった高校生クイズ—出場募集のCMを見てすぐ行動を開始。クイズの実力より、まず出れる人—そんな条件で集まったのは、ひとえに運が良かったのだ。

一番の難関と思っていたYES・NOクイズをわずか一問で通過。その後もあれよあれよという間に勝ち進み、ついに準決勝まで来た。こうなったら優勝を狙っていこう、と僕は思った。

外が暗くなり、スタッフの一人が呼びに来た。準決勝の始まり。やけに光っているセット—そのまわりに仕事を終えた人々が集まっていた。説明があるというので、僕らはセットの少し横に集められた。スタッフの中でも少し偉めの人が説明した。

「準決勝は個人戦です」—思えば、ここで運はつきていたのだ。結果はご存じのとおり。高橋、目黒の二人はすぐに消え、残った僕も、「アトランタ五輪」という間違ってはいけない問題を落として負けてしまったのだ。

教訓—

「みんな見れるものは見とけ」

決勝の船上まで行きたい

目黒邦夫

誰もが知っていて、誰もが一度は参加してみたいと思う高校生クイズ。僕がこのイベントに参加したきっかけは、秋高大運動会の時、嵯峨君に「高校生クイズに出てみない」とさそわれたことだった。僕は「いいよ」と何も考えずに返答したが、この返答が、結果的に僕たちが東北予選を勝ち、全国大会準決勝まで行くことに発展していった。

初めは東北予選で勝ち残る予定はなく、一問目で負けたら何をしようかずっと考えていた。でも、あれよあれよと勝ち進み、ついに全国大会に出場することになった。

全国大会では、常にうかれていた。交通費、宿泊費などすべてタダで、お金はおみやげにしか使うことがなく、番組やCMの収録などの体験もできたから。

今回、初めてテレビの収録というものを体験したが、あまりの時間のかかりようにびっくりした。一回収録しては何時間も待たされることの連続。初日は宿に着いたのが夜の12時ごろ。でも、待ち時間の間に全国各地の代表の人たちと親しくなり、特にラサール高校の人たちとは夜中まで騒いでいた。

高校生で、同じような年齢で、違いはないのだが、地域・学校によって、生活の在り方など、多少ある。それを共通の目的ということで、乗り越え、一緒になった。

この夏の僕らの体験は、一生に一度あるかないかの貴重なもの。でも、僕たちはまだ一年生ゆえチャンスがある。できれば来年も、嵯峨君、高橋君とで奇跡を起こし、決勝の船上まで行ってみたい。

経験に損はない

高橋尚義

全くくだらない理由で参加した全国高等学校クイズ選手権。意外にも自分に大きな広がりを与えてくれた。

僕が最も感動したのは予選でも全国大会でもみんながみんな高校生としての可能性を完璧にまで高めていたことだ。コスチューム、解答方法、表現のどれをとっても自分らしさを主張していた。異様なほどの会場の雰囲気に初めは茫然としたが、独特な雰囲気が自分たちをその気にさせていた。この「独特な雰囲気」というのは学校祭などの時によく感じるが、改めてその感じに気が付いた。初めはみんな単体なのだが、いつの間にか話すようになり、協力し、同情し合うようになった。全くバラバラの人格が一つになり、クイズで敵対してもまた一つになれる。自分たちだけという事象がお互いによい人間関係を作り出す。そしてよい友人に会う事で自分を広げられる。今回の体験で僕はクイズのことよりもむしろそのようなことの方が印象に残った。

来年の春あたりクイズ選手権の同窓会をやろうという。同窓会自体楽しみだが、それ以上に、同窓会が開けるぐらい仲間が増えたことを嬉しく思う。これを機に僕はさまざまな活動に積極的に参加してみたいと思う。

経験に損はないからだ。

IYATAKA
小西悠一
(昭和41年卒)
㈱コニシ時計店
コニシ本店／ほんきん西武2F
エレガンス店／ダイエー秋田店4F
ジュエリー店／ダイエー秋田店4F
コニシ男鹿店／ジョイフルシティ男鹿

平成9年春開通

株式会社 第一会館
常務取締役 中村健一
(昭和41年卒)
秋田市大町五丁目4－28
TEL 0188(64)1166 FAX 0188(64)1170

ミナト工機株式会社
秋田市ガス局・水道局指定店
都市ガス・給排水衛生設備設計施工
代表取締役
高田屋憲次
(昭和41年卒)
〒011 秋田市土崎港北七丁目5-75
TEL 0188(45)0891 FAX 0188(45)2841

代表取締役社長
北嶋正
(昭和41年卒)
彌高会館
Phone 0188-35-1188

随想　敗戦の反省と教訓

貝沼研造（昭8年卒）

昭和初期の二十年間は、日本史上未曾有の激動・動乱の時代であった。

日本が昭和に入って俄に軍国主義化の道を辿り、十五年間にわたり、満州事変・支那事変・大平洋戦争と戦いを拡大し、遂に敗戦の淵に沈んだ原因は一体何だったのか。

その反省を教訓として、次の二点を挙げて若干論述したい。

(一) 明治憲法の欠陥

昭和五年、ロンドン条約締結のとき明治憲法の盲点をついて、「統帥権干犯問題」が発生し、浜口首相は右翼の一青年に狙撃された。

明治憲法を起草制定した伊藤博文らは、統帥権独立などと夢にも考えなかったけれども、憲法の条文は統帥権は天皇に直属し、政府から独立していると誤解される欠陥を持っていたのである。

統帥権独立を乱用すれば、軍は勝手に満州事変や支那事変を開始・拡大することが出来たのである。

また、明治憲法では、大臣が一人でも、閣議に従わずに辞任すれば内閣は総辞職しなければならなかったし、二・二六事件後の混乱時に、軍は陸海軍大臣と次官を現役にするという制度を復活したので、軍の方針を受け入れない政府は存立不能となり、遂に大平洋戦争へと突入したのである。

このような欠陥を持つ明治憲法も、「神聖にして犯すべからざる天皇」の制定した「欽定憲法」であり、「不磨の大典」と呼ばれては、改正などは何人の念頭にも浮かばなかった。

戦後の新憲法は、明治憲法の反省に立って、首相の権限は強化され、三権分立は確立されている。

戦争を放棄した新憲法は、戦後五十年間、日本の歩みにそれなりの貢献を齎したけれども、「平和憲法」の故をもって、「不磨の大典」としてはならない。

現に憲法の条文と現実の自衛隊や軍事対策の間には、矛盾も生じているのである。その矛盾を糊塗的な解釈に終始することなく、常に時代の趨勢に応じて、検討・修正しなければならない。さもないと、明治憲法の轍を踏みかねないであろう。

(二) 情報（敗戦）の秘匿

昭和十四年、関東軍は軽率・無謀なノモンハン事件を惹起して、惨敗を喫した。その理由は圧倒的に優勢な戦車・重砲・補給力を持ったソ連軍の攻撃に対して、敵軍を軽視し、精神主義・白兵主義を重視して、兵力を逐次投入した関東軍の統帥の失敗である。

この敗戦を徹底究明して、近代戦闘の教訓を得たならば、それから僅か二年三ヶ月後に世界戦争に突入する愚は避け得たであろう。

作戦の失敗を秘匿して、そこから教訓を汲み取らなかったことが、大平洋戦争に入っても同じ過誤を繰り返して、敗戦に至った最大の理由であり、軍中枢部統帥の責任である。

さて大平洋戦争は緒戦において予想外の勝利を収めたけれども、昭和十七年六月、ミッドウェー海戦において、圧倒的に優勢な戦力を保持しながら、緒戦の勝利による驕りと油断のため、最後の一瞬に惨敗を喫し、戦局は一転した。

この敗戦を海軍は徹底的に秘匿し、真相を究明してその後の作戦の教訓とすることなく、山本司令長官や南雲中将も責任を取ることはなかった。

昭和十七年八月以降約半年間のガダルカナル島の死闘は、真面目な米軍との初めての地上戦であった。

米軍は制空権・制海権を確保の上、近代兵器に重装備された圧倒的に優勢な兵力を「ガ」島に投入し、これに反して日本軍は、劣勢な兵力を逐次投入し、兵器・弾薬・食糧等の極端な不足に苦しみながら、白兵戦闘で惨敗したのである。ノモンハン事件と同じ過誤を繰り返したのである。「ガ」島撤退後の日本軍は、同じような作戦の錯誤を反覆しながら、連戦連敗、後退を余儀なくされたのである。

昭和十九年六月、米軍のサイパン上陸時に決行された「マリアナ沖海戦」で、日本海軍は壊滅的打撃を受け、空母航空隊と基地航空隊の大部分を失い、爾後海軍としては、組織的な作戦を実施する能力を失ったのである。

従ってこの段階において、日本は戦争終結の方策を探るべきであったし、レイテ戦以後の日本側の死者二五〇万は、ある意味では避けることが出来たのである。

このマリアナ沖海戦も、海軍は徹底的に秘匿し、その後比島・硫黄島・沖縄と玉砕戦が続いたのである。

上記のように、戦争中権力を握っていた軍中枢が敗戦を秘匿し、そこから教訓と対応策を見出さなかったことが、真の敗因と私は結論したいのである。

さて「昔軍部、今官僚」と最近言われているが、政策決定や行政運営において、権力を握っている官僚の驕りと情報の秘匿、責任回避が、住専問題・エイズ問題・もんじゅ事故などを引き起こし、国家を危機に陥れているのではなかろうか。

わが秋田県の食糧費問題等を新聞紙面で見ていると、やはりリーダーの情報秘匿と無反省が依然として、戦後も続いていることを懸念するものである。

（平成八・八・一五誌）

秋高の歴史にみる人物像第一次掲額決定

田中隆三氏

昨年の平成7年より、同窓会館―「羽城館（校史資料館）」に「秋高の歴史にみる人物像」を選考掲額しようと、「羽城館整備委員会」で練り上げ再三話し合ってきたが、この程漸く第一次掲額の人物像の決定をみた。秋高にとって、創立時活躍した人々ゆえ、写真・略歴等収集できかねるので、その方面では「パイオニア」的存在の県立博物館のご協力を得て、すすめて行くことにしている。

掲額の決定をみた先輩および恩師は、次の27名。

なお掲額の対象候補者はまだ20数名いるが、皆さまからご希望等お寄せいただければ幸いです。

秋田県立秋田高等学校の歴史にみる人物像（掲額者）

明治13年　町田忠治
14年　田中隆三
26年　二木謙三
27年　小西正太郎
28年　小田内通
上遠野秀忠
31年　小場恒吉
菅礼之助
塩田団平
33年　滝田哲太郎
37年　斎藤佳三
38年　物部長穂
湯沢幸吉郎
39年　木村謹治
堀井金太郎
41年　石井漠
42年　中川重春
43年　多田等観
44年　須磨弥吉郎
大正3年　武藤鉄城
5年　東海林太郎
職員他　寺崎広業
石井露月
真崎勇助
小田島樹人
小野進
伊達芳太郎
計27名

年次別会費納入状況　昨年より二百三十万減

単位：円

定時制・通信制

年次	件数	金額
定・中		
昭和21	8	16,000
23	5	10,000
24	2	4,000
25	1	2,000
27	17	34,000
28	12	24,000
29	8	16,000
30	3	6,000
31	8	16,000
32	5	10,000
33	2	4,000
34	3	6,000
35	5	10,000
36	4	8,000
37	2	4,000
38	5	10,000
夜間部		
昭和24	3	6,000
25	4	8,000
26	8	16,000
通信教		
昭和35	2	4,000
38	3	6,000
39	1	2,000
41	1	2,000
42	1	2,000
定・大		
昭和28	1	2,000
29	1	2,000
32	1	2,000
定・戸		
昭和31	1	6,000

全日制

年次	件数	金額
大正7	1	2,000
10	1	2,000
11	1	2,000
12	5	10,000
13	4	8,000
14	9	18,000
15	4	8,000
昭和2	3	6,000
3	8	16,000
4	14	28,000
5	17	34,000
6	17	34,000
7	26	52,000
8	35	72,000
9	31	62,000
10	32	64,000
11	51	102,000
12	56	112,000
13	52	104,000
14	46	92,000
15	64	128,000
16	70	148,000
17	56	120,000
18	84	168,000
19	71	142,000
20・5卒	86	180,000
20・4卒	81	162,000
21	49	98,000
22	49	98,000
23	82	164,000
24	14	28,000
25	102	204,000
26	144	296,000
27	127	264,000
28	100	220,000
29	188	379,700
30	142	294,000
31	119	240,000
32	99	226,000
33	112	232,000
34	139	290,000
35	136	282,000
36	107	214,000
37	116	232,000
38	83	166,000
39	133	270,000
40	104	234,000
41	85	170,000
42	96	192,000
43	104	210,000
44	73	146,000
45	81	162,000
46	83	174,000
47	48	104,000
48	58	116,000
49	97	210,000
50	86	172,000
51	69	138,000
52	52	104,000
53	54	116,000
54	52	104,000
55	44	88,000
56	41	82,000
57	49	98,000
58	42	84,000
59	2	4,000
60	45	90,000
61	60	120,000
62	65	138,000
63	71	142,000
平成1	63	128,000
2	75	158,000
3	1	2,000

年次	件数	金額
定・雄		
昭和33	1	2,000
34	1	2,000
36	1	2,000
39	1	2,000
旧職員	32	66,000
近畿支部他	19	104,000

計　9,975,700円

さらなる会費納入のお願い

同窓2万名の皆さまには、会費（2千円）納入にご協力いただいて、ありがとうございます。しかしながら、今年度は昨年に比べ、約230万円の減です。お忘れになっておられる方もおありと存じます。一応〆切り日（9月末日）を設けていますが、年中受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。なお同窓会の「払込取扱票」をお無くしの方には、もう一度取扱票をお送りしますが、普通の「郵便払込用紙」でも結構です。

普通の「郵便払込用紙」使用の場合明記すべきこと。

1、口座番号
　02500　6　54147
2、金額　2000円
　（五年分1万円の方あり）
3、加入者名
　秋田県立秋田高等学校
　同窓会会長　丸山　健
4、卒業年次T、S、H年
5、郵便番号
6、住所
7、氏名（フリガナ）
8、電話

の中、4、5、6、7、8は通信欄にご記入をお願いします。

FAX　0188－32－9588

パラエティショップ　ヨロズヤ
秋田市中通6丁目13-30市民市場通り ☎34-6255
古物の老舗　よろずや
代表取締役　水品光一（昭和41年卒）

あ！ちょっとちがう愛がある。
株式会社リューワ建設
TEL 0188(31)2210代
代表取締役　吉川隆三（昭和41年卒）

祈る心をたいせつに
土崎神明社
宮司　伊藤幸枝（昭和7年卒）
禰宜　伊藤茂樹（昭和42年卒）
〒011 秋田市土崎港中央三丁目9番37号
電話 0188－45－1441
FAX 0188－45－2417

大曲支部総会

6月14日（火）、母校より丸山会長・松岡校長をお迎えして、「川端」で支部総会を開催。新任同窓、小野寺盛明大曲警察署長、松橋勇仙北県税事務所、鎌田浩治大曲市助役をはじめ30名程集まって、盛会裡に終了した。

出席者　山口敏治、加藤芳男、小松正一、富樫公一郎、根本幸蔵、藤田紀一、清水貞夫、椎名光雄、有明秀太郎、横山孝、下山維敏、戸沢金雄、伊藤圭右ェ門、佐々木岩男、茂木晃、大阪昭治、佐藤祐悦、倉田隆一、佐藤元一、辻久男、高柳泰侑、高橋良一、小山田雍、山木栄美幸、森本光博、武田陽、山下栄敏、佐藤仁志、田口圭樹、佐藤良和、高田博充、以上

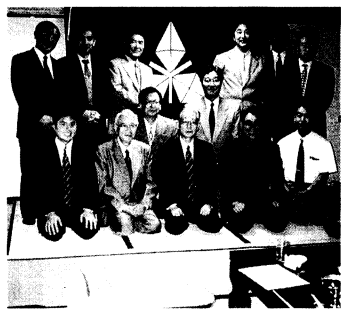
つどい

去る6月21日、丸山会長、田口事務局長のご出席をいただき、第3回宇都宮支部総会が開催された。栃木県下の同窓会員は登録80余名にのぼるが、当日は13名が市内の割烹明治屋に集った。

この度の総会は、所用のため常連諸氏の欠席が相次ぐ中、初めて出席された新顔が7名を数え、今後の支部活動に厚みを加える結果となった。

年齢的にも大きく若返ったこの日のメンバーを前に、鷲谷支部長は「練習は不可能を可能にする」という小泉信三先生の名言を引かれて力強く挨拶されれば、丸山会長は母校の校歌誕生にまつわる土井晩翠秘話をユーモアをまじえて披露されるなど、会は格調高くアカデミックな雰囲気で始まった。

杯を重ね、会員諸氏の近況報告を聞くにつれ緊張も次第にほぐれ、学窓で青春を謳歌した秋中・秋高健児の顔が甦り、最後に校歌・校友会歌の大合唱で、名残惜しくもこの日の幕が下りた。

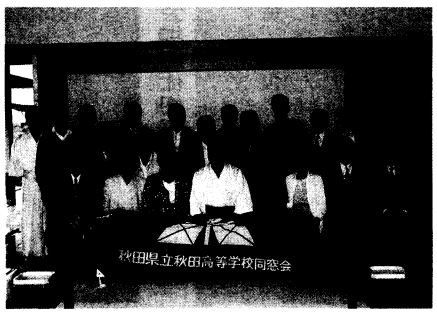


宇都宮に健児あり

首都圏秋高30会

去る9月13から14日、観光客で賑わう栃木県日光で本年度の首都圏秋高30会を開催。

首都圏秋高30会は平成2年に発足し、今回はその第7回目。子年生まれの30会生にとっては還暦の年でもあるため、9月14日の正午から還暦のお祓いを行った。幹事の堀　義顕君と東照宮宮司との特別なご縁がりで今回のお祓いは最高級のもてなしとサービス。当日は1年半前に45億円をかけて建てられた新社務所で、宮内懐石料理を頂き、巫女の案内で上神庫の象の彫刻、神厩舎の見猿、聞か猿、言わ猿の彫刻、陽名門（日暮らしの門）、坂下門の眠り猫の彫刻等、東照宮内の要所を説明して貰い、続いて本殿内の特別の間でお祓いの儀式を行った。



次に現在は日光東照宮美術館となっている旧社務所・朝陽閣で横山大観画伯以下、朝陽閣建立時の最高峰の画伯達の力作の絵画を鑑賞した。最後に再び新社務所に戻り、「なおらい」の儀を行って当日の行事をすべて終了。

お祓いの記念品として、還暦のお札、鼠の絵馬、「なおらい」の儀で使った葵の御紋の入った盃を頂いた。

前日の13日昼は、有志8名によるゴルフプレーで、コースは奇しくも昭和30年に開場された名門日光カントリークラブというのも何かの縁と、一同感慨を深くした。また、21名が前夜パーティを楽しんだ。今回は常連の首都圏在住メンバーに加えて、秋田から3名（内2名は女性）の特別参加を得て、郷里との繋がりを再確認出来、会の雰囲気を一層盛り上げた。特に山寺慎子さんの純粋で賑やかな秋田弁は久しく郷里を離れていた者にとって古き時代を思い出す最高のアトラクションとなり皆の喝采を浴びた。14日午前中は日光周辺を観光した後、正午から上に述べたような還暦のお祓いを行って全会員の平穏と健康を祈願しつつ、平成8年度の秋高30会の例会を滞りなく終了した。

（平成8年9月　浅原記）

筆者注：「なおらい」の儀はお祓いで得た家康と同じ神格から人格に下る儀式です。

佐々木先生を迎えて
―茨城秋高会―

佐々木先生

9月14日、茨城秋高会（会長　松本善也　昭19年卒）は所を変えて『世界のつくば』のど真中、筑波第一ホテルで例会を開催。

まず、昨年につづき、格調高く講演会を今年は、泉谷雅清君（昭36年卒）の計らいもあり、東大法学部　佐々木毅教授（昭36年卒）の『これからの日本の政治』を時節柄大変興味深く拝聴しました。

本部からは、山谷顧問と小玉教頭先生。知道会（姉妹提携の水戸一高同窓会）からは、山形幹事長外、土浦支部からもご出席をいただき、例年にない盛り上がりとなりました。

会は、藤原功君（昭40年卒）の軽妙な進行のもと、総会を省略して懇親会へ。今年は、田村鉄男（昭17年卒）顧問の発声で、急遽持ち込んだ『太平山』『新政』で乾杯。

つくばという場所柄、新しい顔ぶれもかなりの数であったが、すぐに意気投合。あちらこちらから、心地良い『なまり』が聞こえる頃ともなり、大先輩明石さんに似ている小林晴八君（昭34年卒伊奈高野球部長）から茨城大会決勝で甲子園行きをのがしたユーモアたっぷりのスピーチなどが飛び出した。

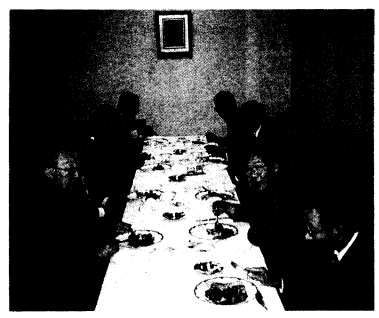
両校のエールの交換後、ほぼ全員が予約貸切の豪華サロンに移動。

菊池壬子郎顧問（昭5年卒）松本会長両夫人をまじえての二次会。飲みながら秋田民謡から旧制高寮歌、往年の名曲を歌いまくり、最後に、山田英明君（昭36年卒）からバトンタッチを受けた、高橋理輔君（昭39年卒）の本格的な指揮のもと、5番までの校歌斉唱。ようやくにして、来年の再会を約し散会となった。

菊池壬子郎・田村鉄男・内藤邦雄・松本善也・丹波和世・伊東貞夫・戸島　均・遠藤弘毅・柴田久志・小林靖八・中山　駿・泉谷雅清・山田英明・小松利英・佐々木重明・佐々木英俊・高橋克巳・高橋理輔・守屋和彦・半田啓二・小玉健太郎・藤原　均・西野誠二・高橋善和・石川文紀

14年以上続く昼食会
―昭和27年卒―

二十七年卒同期会の活動の拠点は、毎月第四月曜の「昼食会」にある。卒業記念誌「最後の秋中生の泣き笑い」は、この会の喧々囂々（けんけんごうごう）の論議がきっかけだったし、また、最近は機関誌「秋高27会報」の編集会議の場にもなっている。



同期生の情報交換の場にと誕生したのが昭和五十七年十一月。会場は当初が秋田市大町二丁目のビルの中にあったが、翌五十八年九月から今の平安閣に移し、以後、十三年間、総会など例会の準備、世相談義、また、時には夜の集まりの謀議の場ともなってきた。

第二の人生に入った今は、出席者は少なめだが、それでも常時十人前後は固く、懐メロで祝った今年の中学入学五十周年の記念行事もこの場で生まれた。還暦もとうに過ぎ、物故者、病気が話題になる昨今。同期会活動にカツをいれるためにアイデアを凝らそうと辻悌五郎代表幹事以下張り切っている。

（信太聡一記）

山官の集い
―秋田営林局支部総会―

恒例の総会が十月四日彌高会館で行われた。一時は、秋田・山形両県の国有林野事業の管理運営を、それぞれの立場で担ってきた百十余名の支部会員も、現在は殆どOB。現役会員はとうとう二桁を割った。にも係わらず、この日の出席者は例年より多い三十一名。

総会では、この日を待たず九月二十六日逝った高畑幹穂氏ほか三十七名の物故会員のご冥福を祈って黙禱を捧げた後議事に入り、諸報告の承諾、欠員役員の補選などを行った。

続いて、丸山同窓会長、斎藤教頭先生、石岡営林局総務部長にご来席いただいて懇親会に移る。丸山会長の例によるユニークなご挨拶、斎藤先生の細を穿つ学校近況のお知らせ、石岡総務部長の秋高出身者の活動を讃えるご祝辞が終わって、宇梶大先輩？の相も変わらぬ愉しい乾杯の音頭。久闊を叙しての盃のやりとりが始まって、時の経つのも忘れるくらい。最後は校歌斉唱で宴を締めくくったが、蔭で声あり―天上はるかに太平山の―太平山は、我がテリトリー（職場）だったのだよなあと。

（国安記）

すっぽんととらふぐ
㈱かがや
加賀谷　実
（昭和42年卒）
全国珍味・割烹材料
高級鮮魚
●水産部　市民市場　☎33－1074
●珍味部　土崎倉庫　☎45－0606
贈答用　●鮮魚セット　●珍味セット

総合建設業
長田建設株式会社
取締役社長
長田憲一
（昭和42年卒）
本　社/本荘市石脇字田頭208番地の2
TEL 0184(22)0722(代表)
FAX 0184(23)3346
秋田営業所/秋田市山王三丁目1番7号(東カンビル6F)
TEL 0188(63)0149
FAX 0188(64)9740

株式会社鎌田会館
株式会社杉のや
代表取締役社長
鎌田　壽
（昭和42年卒）
運営本部
秋田市中通四丁目1－15
TEL 0188－35－2232
FAX 0188－31－2727

ボールペンから事務機まで
㈱金子（かねこ）
代表取締役
金子真悟
（昭和42年卒）
本　社/秋田市山王五丁目12-21
TEL 62－5371(代)
大町店/秋田市大町三丁目4-45
TEL 63－9009

株式会社竹半
代表取締役社長
竹屋直太郎（昭和42年卒）
専務取締役
大野日出治（昭和38年卒）
取締役経理部長
林　昭三（昭和30年卒）
秋田市大町一丁目2－15
TEL 0188－62－4737

TAKUMI
ARCHITECT'S ASSOCIATES
株式会社匠設計工房
代表取締役
井村　博（昭和42年卒）
専務取締役
人見高司（昭和42年卒）
芦野智之（昭和45年卒）
〒010 秋田市保戸野通町5－34
TEL(0188)63-1258　FAX63-1972
〒171 東京都豊島区西池袋2-39-8
TEL(03)3988-8471 FAX3988-8472

六名の恩師を囲み、歓談
― 昭和49年卒同期会

昭和49年卒業者の同期会は8月12日午後5時から秋田キャッスルホテルで開催された。

当日は会員50余名に加えて6名の恩師のご出席をいただき、酒を酌み交わしながら旧交を温め合い、楽しい一時を過ごした。本会は卒業以来隔年の正月に同期会を開催しているが、旧盆の時期の開催は初めてであった。このため、前回を相当上回る出席となったことや、初参加の会員もいたことから開催時期の変更が功を奏した模様である。また、今回は昭和50年卒業および昭和51年卒業の諸君の同期会が同ホテルの隣接会場で同時刻に開催されたこともあり、6名という多数の恩師の方々の出席をいただいたことも大きな収穫である。なお、開会直後に写真撮影したため、参加者のうち数名が欠けていることをご容赦願いたい。

（黒木記）

妙齢？の女性十三名にうっとり
― 昭和50年卒同期会

平成8年8月12日（月）午後6時から秋田キャッスルホテルにおいて、62名の出席を得て同期会を開催した。今回は、お盆ということで、前回（平成6年1月）に比べ約20名近く出席者が増え、中でも女性は13名を数え、これまでの最高となった。（男性諸氏を喜ばせたことはいうまでもない。）

はじめに、幹事である倉田尚樹君の司会で開会、同じく幹事を代表して、辻良之君が挨拶した後、最も遠方からの出席者である、三浦和也君（豊中市）と桑原まゆみさん（京都市）のおふたりに乾杯をお願いし、楽しい宴の幕開けとなった。

途中、出席者全員およびクラス毎の記念撮影をはさんで、皆懐かしい卒業写真のスライドを見ながら、今回出席くださった、湊潤二郎先生、近藤繁先生、小野寺豊先生から当時の思い出話などを交えながら挨拶をいただいた。

また今回は、両隣で49年卒および51年卒が同時に同期会場の仕切りが取り払われ、三学年が入り乱れての同窓会になりました。永遠に続く先輩、後輩の仲。すっかり大人になった諸先輩の懐かしい顔を拝見するのも、また楽しいものでした。

今回の参加者は九十人ほど。担任だった恩師の先生たちからも、相変わらずの元気なお言葉をいただき、うれしくなりました。酔った勢いで、また三年後に集まる約束をしてしまいました。

3年前の約束実現
― 昭和51年卒同期会 ―

八月十二日、卒業後二回目となる五十一年卒の同期会を秋田キャッスルホテルで開きました。卒業してから十七年目にして初めての同期会を開いたのが、平成五年の正月。

「三年後にまた合おう！」酔った勢いで誓い合ったその時の約束が、図らずも実現したものです。若年同期会の盛り上がりは今ひとつだそうですが、「やるときはやる」五十一年卒です。

そのうえ今回は、四十九年卒、五十年卒の優しい(?)先輩たちと合同の同窓会となりました。四十九年卒、五十年卒はお盆に毎年開いているとお聞きしていたので、「それなら一緒に」と、話がまとまったものです。

宴もたけなわとなった頃、

十一紫会の集い
― 昭和11年卒

昨年の喜寿の節目の際に、とにかく傘寿まで頑張ろうと話し合った。本年度の同期会は十月十八日、八橋の老人いこいの家で催した。

本年度に入ってから、もう五名の仲間の訃報の連絡を受けた。物故者はこれで百余名を数えることとなった。

話はおのずと物故者との思い出となり、青春時代の過ぎし日を懐しく語り合った。

傘寿の集いは、東京の馬年会と話し合って決めることにを開催しており、部の先輩、後輩との久しぶりの出会いも見られていた。

最後には、やはり応援団による校歌の斉唱がコールされ、渋々？ながらも大いに盛り上がり、次回の参集を約束しながら幕を閉じた。

し、出席者の賛同を得た。

校歌を合唱し、健在を確かめ合いながら散会した。

（伊藤記）

当日の出席者

佐藤民治　信田昭　佐藤岩雄
熊谷義一　森義亮　国柄隼男
伏見武治　市川稔　藤原義三
佐々木六郎　渡辺純一郎
小川宇一郎　目黒武士男
水谷勝一　伊藤馨

秋山光雄先生 叙勲
四校合同祝賀会

春の叙勲で、勲四等瑞宝章受賞に輝いた第32代校長の秋山光雄先生（72歳）の祝賀会が、男鹿高校、湯沢高校、秋田高校、経法大附高の四校合同で6月29日（土）秋田ビューホテルで行われた。秋田県知事、丸山健同窓会長はじめ来賓の方、四校の先生たち二百五十名の大祝宴となった。秋高にとっては、学園紛争の混迷を立て直し、新生秋高の礎を築き豊かな識見と卓越した指導力で、高校学校教育の充実に貢献された秋山先生。来賓の祝辞に続いて、代表の一人松岡正樹校長のあいさつの要旨、「秋山光雄先生の叙勲祝賀を四校合同で行うことができましたことを皆さまとともに喜びたい。先生の教育者としての偉大なご功績、特に困難に直面した時に示された鮮やかな解決の手法など印象に残っています。それらの教えを永遠の教育哲学として受け継ぎたいと思います」また横手高校の高橋克二校長は、「県高校長協会長として、また県高体連会長としてその卓越したご業績（大学入試制度一大変革期における対応・59インターハイ秋田大会での組織力）は勿論、全国的に早い時期に本県の『高文連』創設のため尽力されたご功績は、その後の本県教育界伸展に果たした原動であります。『飲水資源』という言葉にもあるように、先生は本県教育界の課題を解決して行くための井戸を掘って下さった方です」と述べた。

秋山先生のごあいさつの後祝宴に入り、特に経法大附高の先生たちによる即興劇などがあって、大盛況の裡に散会した。

汀友会総会
― 秋中・秋高土崎支部 ―

十一年ぶりの汀友会は十月十四日、丸山会長・松岡校長を来賓にお迎えして約百名が参会し、「ホテル大和」で開催された。

安田庄一氏（昭23）の司会で、校歌・汀友会歌(II)斉唱の後、代表世話人・清沢義俊（昭9）のあいさつがあって、来賓の丸山会長・松岡校長のあいさつを頂き、伊藤幸枝氏（昭8）の乾杯の発声を得て、セレモニーをおえ、懇親・懇談にうつった。

参会者は、昭和八年卒から、昭和四十四年卒まで、戦争をはさんで、三十六年、時間を越えた先輩・後輩の語らいであった。

「そもそも吾等は汀友カンパニー」とうたわれる会歌は、花岡泰雲氏の作詞で、「高清水の丘に球を追いて」「川面に響くオールの雄叫び」などは、その情景をうたったものである。

在校生は四月に入会式を学校で行い、九月頃、早朝、天徳寺へ集まり、天徳寺から学校まで歩く行事を持っていた。三船新次氏（昭31）、高田屋敏夫氏（昭34）が、汀友会在校生の面倒をみていた。

今は、そうした集まりもないとの由、大変淋しい事と思う。学校の方は在校生の汀友会をお願いしたい。

（竹内一朔記）

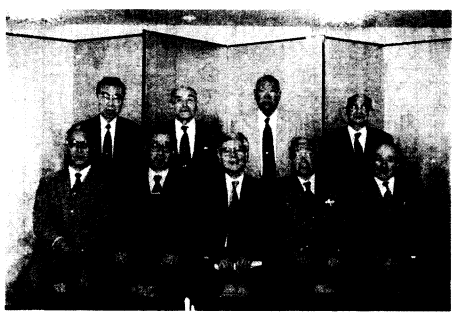
「汀友カンパニー」は、旧制秋田中学時代は、土崎小学校からの入学者、新制になってからは、土崎中学校から、秋田高校に入学した人達を会員とした。

会の創立は、明治三十年代と聞いている。現存する会誌「汀友」は第七号で、大正九年の刊行になっているので、会誌は、大正初年ごろより年一回、刊行されたものらしい。

いつの頃からか（戦後）「馬車道」と名をかえ、年一回をメドに会誌を出していた。

かつては、会のなかに野球部・ボート部を持ち、会歌(II)

喜寿を祝う同期の集い



昭和十三年卒の同期会は、十月九日、アキタスカイホテル九階の北かまくらで、九名が集い開催。まず記念撮影をし、大槻幹事の司会ではじまり最初に物故者に対する黙禱、冥福を祈った。菅原代表幹事が「この一年間で七名の学友が鬼籍にはいり、痛恨の念に堪えない。故人の遺志をくみ、一層結束を強め八十才になるまでは是非続けたい。」旨の決意をのべ、遠来の平沢哲夫君の音頭で乾杯し開宴、久濶を祝し合う。

喜寿を迎えたもののすこぶる元気。しばし懐旧談に花を咲かせた。菅原が即興の漢詩

紅顔にして矢留（秋中）に
　学び
辛酸して喜寿を迎ふ
相知悉く白首となる
歓を交えて往事を偲ばむ

伊藤君の発声で校歌を高らかに歌い、再会を約して家路についた。

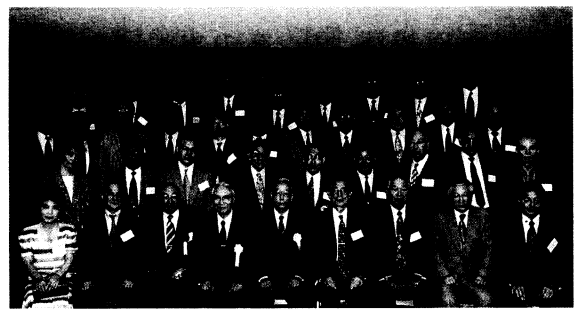
出席者

石黒隆二　伊藤繁雄　近見喜代彦　大槻家静　進藤一雄
菅原繁雄　畑澤恵　平沢哲夫　平野庫治

（菅原記）

秋田市内のいで湯 さとみへ
秋田温泉 さとみ
秋田市添川字境内川原142の1
TEL（0188）33－7171
専務取締役
手塚　鋼
（昭和42年卒）

39人つどい
―札幌支部総会



第十三回札幌支部総会は七月五日夕、市内の経済センターで会員三十九人が参加して開かれ、酒くみ交わしながら歓談、「天上はるかに…」を斉唱して青春のころに思いをはせた。

まず支部長の相馬守胤さん（S22年）があいさつのあと新役員と幹事を選任。新支部長の佐々木郁夫さん（S20年）が今後の抱負を述べた。続いて、はるばる本部から出席された田口能祐事務局長の乾杯で開宴、丸山健会長のユーモアあふれる母校のお話に耳を傾けた。酔うほどにムードは盛り上がり、佐藤洋一さん（S37年）の音頭で校歌を合唱。また全員が自己紹介を兼ねて近況を報告し合った。最後は出席紅三点のうちの一人、小泉嶺子さん（S36年）が「いずれは全員ご夫婦で参加を」と呼びかけ乾杯して、すすきのの二次会へ席を移した。

96年度支部役員次のとおり。
支部長＝佐々木郁夫（S20）副支部長＝石沢昭義（S26）播摩屋敏生(35)加賀屋誠一(41)幹事＝武田実（S20）佐藤祐三郎(27)池田高明(32)秋元敏見(33)武藤実(33)小泉嶺子(36)河野隆(38)合田由紀子(43)小野義孝(46)

第14回　若菜会

第十四回若菜会が、九月二十一日（土）午後五時より秋田市のキャッスルホテルにおいて昭和三十七年卒が当番幹事として行われました。

今回は旧校舎での思い出を語り合いましょうという事で、駅前の旧校舎に在校した昭和二十九年卒の第一期から、昭三十九年卒の第十一期までの方々と、同時期に在職していらした先生方を対象としてご案内を差し上げましたところ、およそ七割の方々からご返事をいただきました。

当日は、恩師六名（青山成美先生・桜谷吾朗先生・舘岡昇一先生・畑沢潤一先生・最上勉先生・山谷浩二先生）と卒業生三十二名の出席がありました。

会はまず、開会の挨拶に始まり、次に恩師代表として桜谷先生から当時の学校の状況や思い出・現況など、増々お盛んで元気一杯のご挨拶をいただきました。

三十年卒の腰山照子さんの乾杯の音頭の後、全員で記念撮影に移りました。

次に、現在秋高に在職しておられる幹事年の伊藤紘美さんより、学校近況報告がなされ、「校史資料館の催しについて」「最近数年のスポーツの実績」「女子卒業生の推移」「新企画として平成九年から始まる修学旅行に代わるフィールド・ワーク（体験学習）について」等の説明がありました。

その後、中華料理をいただきながらスピーチに入り、各先生、各年度順に自己紹介を混じえながらお話ししていただきました。

一期・二期頃は初めての女子学生として苦労した事、その後の方々は男子学生に大事にされた事など当時の思い出の他、教育行政のあり方、自己健康管理の方法、老人介護の問題等々、様々な話が出され、三浦敦子さん（幹事年）の名司会のもと、楽しくなごやかに二時間の予定時間を大巾に超過して校歌を斉唱の後次会の再会を約して会を終えました。

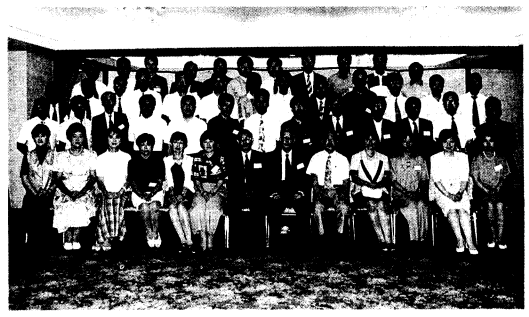
（昭和三十七年卒・三浦美沙子記）

卒業25周年記念
―昭和46年卒同期会―

昭和四十六年卒は、卒業二十五周年記念同期会を八月十六日午後六時よりアキタパークホテルで開催した。

当日は、来賓として、同窓会長の丸山健先生、恩師の近江満先生、伊藤仁先生をお迎えし、同期生五十四名が出席して盛大に行われた。

佐藤幹事長のあいさつ、丸山会長の祝詞に続き、釧路在住の島田雄二君の乾杯で開宴した。卒業後初めて顔を合わせた同期生も少なくなく、九時過ぎまで時間の過ぎるのも忘れて、近況やら、家族のこと、出席できなかった恩師・同期生の動静など話が尽きなかった。



案内の発送が幹事の怠慢から、七月の下旬と大変遅かった。そのため、遠方に住んでいる方を中心に帰省の予定を立てたあとで、日程の調整がつかないなどのお叱りを受けてしまった。本当に申し訳ない。

われわれ四十六年卒は、盆と正月の交互に一年半に一回の割で同期会を開催している。次回は平成十年一月二日を予定している。

「こんな男になりました」
―昭和25年卒同期会―

わが同期会は、毎年9月第3土曜日、秋田ニューグランドホテルと決めてから20回を数える。今年は9月21日（土）会員73人、夫人10人、故人の子息3人、恩師来賓5人の計91人出席のもと盛大に開催した。

大友康二代表幹事挨拶、当事務局の面倒をみてきた「角繁」の追悼集「花のゆくえ」発刊への遺族からのお礼、恩師からそれぞれ含蓄のあるお話、松岡校長から、21世紀にむけて秋田高校の改革、そして硬式野球場新設協力依頼、事務局からの諸報告の後、懇親会に入った。宴たけなわの中、小野崎孝輔君の「みんな早く帰れよ」の一言で締めを行い、来年の再会をたのしみに散会した。

今回は、席次を卒業時のクラス別にしたためか、事務局は予想外のアルコール量に驚き、且つシニアの体調に余計な心配をしたのであった。

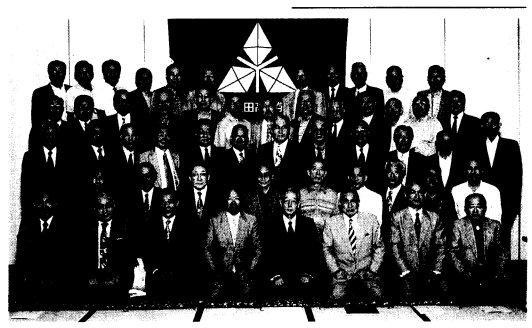
校歌斉唱は5番まで、同期会歌は7番まですべてを合唱し、65歳の今「こんな男になりました」の歌詞を噛締めながら、第一、第二の青春に思いを馳せたのであった。

（10月4日。小林　良弘記）

紅顔日に日に顧み思ふ
―秋中21・22卒同期会

戦後第1回卒業生は、2年に分かれて卒業した。21年四年修了と22年五年卒業とだ。それが同期入学ということで卒業後の会は一緒に行ってきた。今年度は卒業50年という節目。開かずんばやまず。

8月18日（日）、さとみ温泉に集った。恩師の先生がたはご高齢ゆえ残念ながら欠席で、丸山健同窓会長さん、松岡正樹校長先生をお迎えして、56名の若者？司会は相変らず剽軽者の佐藤直一郎氏。物故者黙禱からはじまり、佐藤菊夫氏の指揮で校歌斉唱、世話人代表の高橋昌一氏のあいさつ。はるばる九州から駆け付けた貝沼平八郎氏の乾杯につ



いで懇親会。

めんめんすっかり昔の「あばれん坊」に返って、大騒ぎ。締めのあいさつは渡辺純夫氏。最後は同窓会歌を歌って、一応散会したが、うち34名が泊まり込んで、次の日の19日（月）朝会後有名人よろしく「ゴルフ」競技を楽しんだ。

馬術同好会誕生

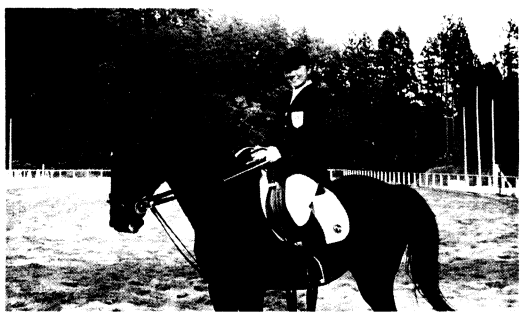
秋高に珍しい同好会が昨年から誕生した。曰く「馬術」同好会。会員はただひとり。しかも女性だ。二年生の「金谷さおり」さん。学校には追分から通っているが、馬術は毎週土・日とそれに祝日、大曲の「乗馬クラブエワセラ」で行う。小5の頃より馬に魅せられ、中学2から正会員になり、本格的になった。

馬装、手入れ、厩舎の掃除等全部して、馬に乗る。

「馬とともにいられるのが嬉しくて」と愛嬌ある笑顔を見せるが、馬が好きで仕様がないらしい。愛馬名「トップオブザオリバー号」―とてもおとなしい馬だ。大会の出場は今年の東北総体が最初だったが、演技中に愛馬が脚をけがして、残念ながら棄権。

「さおりさん」に言わせると「これでオリバーへの愛情が増したので、来年は是非」という。

因みに馬を愛する彼女―大秋高の生徒会の、女性初の会長。素晴らしい人生を歩め。



生徒会長金谷さんの雄姿

水泳部二年連続インターハイ出場

―東北大会・インターハイ・広島国体―

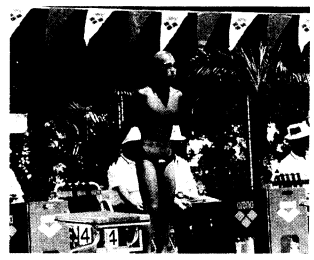
水泳部が県内大会をすべて制し、二連覇を果たした。東北大会では大場怜司（二年）が背泳ぎで、高橋俊太郎（二年）が個人メドレーで全国総体の切符を手にした。両大会でこの二人は自己記録を塗り変えた。国体には野村直史（平泳ぎ）を加えた三名が参加し活躍した。地元で行われた東北新人水泳大会では昨年に続き総合三位に入賞、リレーで坂野、小田桐の一年生コンビが健闘した。

東北水泳大会（米沢市）

百Ｍ背泳ぎ　②大場　怜司　1分0秒96
四百Ｍ個人　④高橋俊太郎　4分50秒77
（ともに秋田県新記録）

全国高校総体（甲府市）

百Ｍ背泳ぎ　大場　怜司　1分0秒68
四百Ｍ個人　高橋俊太郎　4分48秒97
（ともに秋田県新記録）



インターハイ、400M個人メドレー
高橋俊太郎くん

夏季・国体（広島県福山市）

二百Ｍ背泳ぎ㉗大場　怜司　2分14秒83
二百Ｍ平泳ぎ㊷野村　直史　2分32秒06
四百Ｍ個メ　㉜高橋俊太郎　4分52秒83

東北高校新人水泳大会

（秋田県五城目町）
学校対抗男子総合３位
四百Ｍメドレーリレー③
（大場・野村・坂野・高橋）
百Ｍ背泳ぎ　①大場　怜司
二百Ｍ背泳ぎ②　同

インターハイ、100M背泳ぎ
大場怜司くん

全国高校サッカー選手権大会秋田大会
サッカー惜しくも初出場逃す

年末年始に開催される全国高校サッカー選手権大会の予選で、二十年ぶりに決勝に進出した本校サッカー部は、決勝で西目高校に惜敗し、初の選手権大会出場を逃した。この他ラグビー・野球も全国への切符を手にすることはできなかったが、卓球では一年生高松智広君が十二月に行われる全日本選手権への出場を決めている。

サッカー

第75回全国高校サッカー選手権大会　秋田大会
一回戦　秋田５―０能代二
二回戦　秋田６―０男鹿工
三回戦　秋田２―０本荘
準決勝　秋田１（１―０　０―０）０秋商
決　勝　秋田０（０―０　０―２）２西目

準決勝の対戦相手秋田商業は今年のインターハイ出場校であり、しかもこの大会三連覇をねらう強豪。怒とうの秋商の攻めに対し秋高ディフェンス陣がふんばり、体を張ってゴールを死守した。得点は前半24分に左コーナーキックにＦＷ佐々木が頭で合わせた一点のみ。結局これを守り切った秋高が、この大会では二十年ぶりという対商業戦の勝利を上げた。

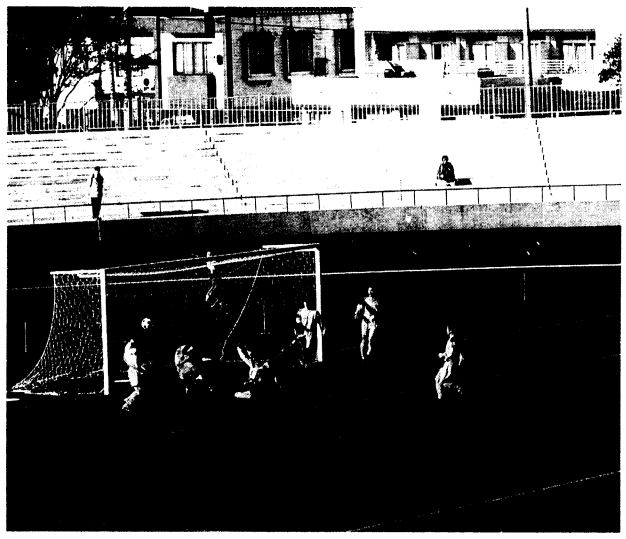
「シュートはたくさん打たれたが（全部で18本）入る気はしなかった」という渡部監督の言葉どおり、ディフェンスの集中力が最後まで途切れなかったことが最大の勝因であった。

二日後の十一月三日、昭和五十年以来二十年ぶりの決勝の相手は西目高校。日曜日とあって多くの生徒職員が応援にかけつけた。

前半は相手に中盤を支配され、得意の速攻が決まらずシュートはゼロに終った。

後半開始早々攻めの形ができいに決まるようになるが、攻め切れなかった。逆に終盤に入って、西目の攻勢が目立つようになり、準決勝の疲れもあってか選手の反応もやや鈍くなったところで二点をとられ、試合を決められてしまった。

やるだけのことはすべてやったが……。試合後の選手達の表情は悔し涙と充実感とが交錯していた。



後半開始五分、ＦＷ桜庭が厳しいチェックをかいくぐってシュート。一瞬誰もがゴールを疑わなかったが、願いも空しくボールがそれて先取点ならず。

受験を数ケ月後に控えた三年生も数名試合に出場しており、今大会にかける秋高イレブンの意気込みは非常に高いものがあった。それだけに全国大会の出場権を獲得できなかった悔しさが強い。

生徒の健闘を心から讃えながらも渡部監督はこう指摘する。「走り負けないスタミナとシンキング＝スピード、それに中盤の〈ため〉の不足が課題である」

次の目標はもちろん来年の夏のインターハイである。商業を始め強豪がひしめいているが今大会の経験を糧に是非がんばってもらいたいところである。

卓球

県硬式卓球選手権大会兼全日本予選会
ジュニア男子シングルス
第三位　高橋　智広（一年）

十二月全日本選手権出場（東京）

十月の中央北区新人大会では予選会で敗れた相手と優勝者に勝っており、着実に力をつけてきている。全日本での活躍が楽しみである。

硬式野球

秋期中央地区大会
二回戦　秋田７―０中央（七回コールド）
三回戦　秋田０―10経附（七回コールド）

ラグビー

一回戦　秋田27―27能代工
※　抽選で能代工が二回戦進出

ボート・舵手付きフォア準優勝

山梨インターハイを振り返って

我が秋高ボート部には二つの大きな柱がある。一つは『楽しく漕ぐ』ことであり、もう一つは『全国制覇』である。楽しく漕ぐというのは、単に楽に漕ぐということではなく、苦しい練習をするときや大事なレースでの緊張状態のとき程『ボートを楽しむ』という意味である。これが意外に難しい。全国制覇は部の大目標である。私にとってはとてつもない重圧と憧れの混在する響きの言葉でもあり、実際ボート部の主力選手として練習を積み重ねるようになると、二つの目標がいかに大切で、そして難しいかを学んだ。そんな中で、私が最初に全国制覇のチャンスを得たのは一年の春の大会だった。その大会では「まさか我々のチームが優勝するはずはないだろう」と思い、楽しく漕ぐことだけに専念してレースに挑み、結果は準優勝。後悔だけが残った。二年の夏のインターハイは、「絶対に優勝するぞ」という強い気持ちで挑んだが、結果は三位。楽しく漕ぐ心に欠けていた。そして今年の夏、三年最後のインターハイ。私は主将でもあり、決勝のレース前のミーティングで全員に言葉をかける機会を与えられた。皆の優勝にかける意気込みはすさまじく、実力的にもそれをねらえる位置にあった。私は皆に向かって一言こう言った「楽しく漕ごう」と。レースの結果は僅差の2位。しかし、だれもレースを後悔するものはいなかった。逆に最高のレースだったと称える声が多かったと思う。このレースで私は楽しく漕ぐことと、全国制覇を目標にする意味を理解し得たような気がする。一・二年生には是非とも『楽しく漕ぎ、全国制覇』を成し遂げてもらいたい。秋高ボート部栄光の日は近い。

ボート部　主将
佐々木智彦

哀悼（敬称略）

謹んで哀悼の意を表します

3月	岡見　辰雄	S11
4月	岩城　雄二	S4
4月	倉田　義男	S11
4月	刈田俊次郎	S19
5月	沢田　正巳	S9
5月	大石　進	S14
5月	森川　永三	S26
6月	佐藤　忠	S12
6月	柴田　均一	S13
6月	鈴木周太郎	S20
6月	渡辺　衛一	S33
6月	武藤　功	S39
6月	今野　茂樹	S50
7月	加賀谷清作	S9
7月	武田　弘	S9
7月	丹下　敬一	S11
7月	三浦　功	S11
7月	高安　泰助	S13
8月	酒井　英長	S12
8月	山田　剛之	S29
9月	槇尾　五郎	S11
9月	岩谷　文雄	S15
9月	北嶋　景次	S15
9月	岩田雄八郎	S18
9月	舟木一太郎	S18
9月	高畑　幹穂	S20
9月	長沢　敏光	S20
10月	杉山重太郎	S9
10月	澤田　重昭	S20
10月	加賀　昭夫	S34
11月	本間　良吉	S24

会務事項報告

8月12日　S59・50・51年次合同同期会
16日　S46年次同期会
18日　S21年次同期会
9月12日　第２回広報委員会
14日　茨城支部総会
14日　30年次同期会
21日　25年次同期会
10月4日　営林局支部総会
14日　汀友会
26日　近畿支部総会
29日　羽城館整備委員会
11月5日　企画委員会
31日　財政委員会
17日　追分支部追分三叉路会総会
18日　第２回名簿委員会
26日　正副会長・参与・各委員長会議
28日　本荘支部総会
29日　S26年次同期会
12月10日　第２回理事会
10日　同窓会だより51号発行

事務局だより

一、四面「会費納入状況」にも書いたが、今年度納入状況はいまいちだ。もう百万円―五百名の納入が欲しい。お忘れになっておられる方は、是非お願いしたい。

二、「秋高の歴史にみる人物像」―一次選考決定をみたが、今後まだ二十名程候補者が挙っています。さらにこれと思われる方がありましたら、お寄せ下さい。

三、羽城館整備委員会の方からお願いです。会員の方に、これと思われる貴重品がありましたら、これまたお寄せ下さい。

四、二月半ば頃、「年次名簿委員会議」を行いますので、当該委員はその予定でいて下さい。

編集局

同窓会だより、第51号を皆さまのお手元にお届けします。

▼「集い」の原稿またまた爆発的に多くなり、21通を数えました。広告欄の関係で、写真を小さくしても一面せいぜい6通ですので、残りを次号に記載いたします。

▼「慶祝欄」「哀悼欄」ですが、漏れてしまった方もおありと存じます。次号に載せますので、是非お知らせ下さい。

▼では皆さま、よい年をお迎え下さい。